

しらかば

2016年春号 第32号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

出前日本語教室

集まる場所ができてうれしい



お待ちかねの出前日本語教室が、手稲前田公園市営住宅団地ではじめて開かれました。3月23日、同団地集会所には、8名の帰国者のみなさんが集まりました。団地内でふだんから付き合いはありますが、こうしてみんなで集まるのははじめてと、笑顔いっぱい。集まる場所ができた喜んでくれました。この地区は、センターまで通所するには乗換など交通の不便な地区です。移動が難しい人もいます。そこで「出前」になりました。集会所は歩いて5分かかりません。

同団地には、6世帯の中 国帰国者一世のみなさんが住んでいます。いずれも1987年からの第一次帰国ラッシュと呼ばれた時期に、40歳代で帰国してきた「残留孤児」です。平均年齢は71歳。いずれも黒竜江省、吉林省の農村出身者で、学校へも行けず、幼少時から苦労を重ねてきた人たちです。中国の農村文化を背景に持ち、帰国後は造園業、建設業や工場で汗にまみれて働き、苦労を重ね、現場で日本語を身につけました。そして仕事を

やめて10年、日本語も使うことも少なくなり、「忘れた」といいます。でも、日本語は勉強したいという気持ちを持ち続けています。

第一回目やさしい日本語と介護予防

初めての出前教室、1時間目は健康運動です。もみじ台団地で行われている介護予防サロンのラダーウォーキングを試してみました。指導は竹田憲司先生です。「転倒防止」のためのラダーウォーキングに、みなさん熱心に取り組みました。「むしろ失敗することが認知症予防」と、上手にできた、失敗したと、お互いに声をかけ合い笑い声いっぱいの教室になりました。



2時間目は、やさしい日本語教室。絵カードを見ながら発話の練習、みなさん簡単にできちゃいます。五十音の発音練習など、思い出すようにスタートしました。「すぐ忘れる」、でも一回一言ずつでも覚えたいと語っていました。

第一回目が終了すると、みなさん充実感いっぱい、晴れやかな表情です。次は4月、みなさん時間を確認しあい、わいわいがやがや、楽しみだと笑顔で語っていました。

稚内 郷土を知る学習会

「故郷」とのつながりを感じて

3月26日(土)稚内 市立図書館に樺太帰国者
10名、支援者3名が集まり、「郷土を知る学習会」
が開かれました。今回は「樺太と稚内のつながり」
という題で、稚内市教育委員会の齋藤議一先生
がお話をしました。

帰国者のみなさんが以前住んでいた樺太、そして
今住んでいる稚内とは昔からつながりがあります。
90年ほど前は、船が大泊(コルサコフ)
と稚内の間をひんぱんに行き来していました。
齋藤先生は古い地図や資料、写真などをスクリー
ンに映して、目に見えるかたちでわかりやすく
説明しました。

昨年フェリーでサハリンに行ったという先生は、
街の様子をカメラに収めていて、日本時代と現在の
様子をスクリーンで比べてみる事ができました。
神社が取り壊されて、ロシア正教の教会が
建っている場所もあれば、古い建物がそのまま
残っている場所も。帰国者の皆さんは興味深げに
見入っていました。



お話を後は、それぞれの体験を語り合う座談会
が開かれました。先生のお話の感想や、自分が
生まれ育った場所の話の後、今年から廃止になっ
てしまった稚内—コルサコフ間のフェリーの
話題に。そもそもサハリンへの行き来がしやすい
から稚内に住むことにしたという人もいるほど
で、この問題は一番の心配の種のようにです。なん
とか続けていこうという動きもありますが、今の

ところは何も決まっています。昔だけではなく、
今もこれからも故郷との「つながり」が大切であ
ることを実感させられた会でした。

旭川 おしゃべり交流会 1年を振り返って

お互いの理解のために、意欲的に計画

3月28日、旭川のおしゃべり交流会は、
帰国者のみなさん、ボランティアさんといっしょ
に1年の交流活動を振り返りながら、新年度の
計画を話しあいました。スライドを見ながら、ひ
とつひとつの交流を思い出し、意義を確かめ合い、
意欲的な話し合いになりました。

帰国者からは、昨年の「稲刈り体験」で開拓の
苦労を知ったので、今度はボランティアさんの
人生を知りたいという意見。ボランティアさんか
らは昨年は樺太帰国者について学んだので、次回
は中国帰国者問題の研修会を、との要望。また、
帰国者の中国、樺太での体験談を聞き、その頃の
日本の生活と重ねてみたらどうかという声もあり
ました。

そして、春を迎える時期、カタクリの群生地、突
哨山にお弁当を持ってピクニックへ行く計画も
決まりました。新年度も活発な交流活動でお互い
の理解がますます深まり、地域での支え合いも
広がりそうです。

進学ニュース! ~ 将来の飛躍へ ~

今年もまた帰国者二、三世が見事に大学に合格
しました。Rさんは札幌大学、Yさんは北海道か
ら遠く離れた沖縄の琉球大学に進学し、現在は
ひとり暮らしです。新生活をスタートさせたばかり
の彼らに、大学の感想を聞いてみました。

「大学生活は高校生活よりも厳しいけれど、
楽しくやっている」(Rさん)。「興味のある授業ば
かりとっているのでは、つまらなかつたことは一度
もない」(Yさん)。将来の飛躍へとつながる大学
生活を彼らが存分に楽しみ、よい成果を収めるこ
とができるよう、心からエールを送ります。

自立研修事業

最後の職場体験で大きな成果

平成25年度から始まった帰国者二世の就労支援を中心とする北海道センターの自立研修事業は、平成27年度で終了しました。この間に、センターでは就職に結びつく日本語集中講座の開設、職場体験実習のプログラムを進めてきました。主な対象は樺太帰国者二世でした。

就職も、折からの不況で言葉を理由に不採用となるケースが多く困難を極めています。そこで事業所、帰国者双方の理解をはかり、就職に結びつけようと職場体験実習を計画しました。しかしながら、職場体験実習の受入事業所も余裕がないという理由で実現が困難で、わずか3件にとどまりました。

帰国者同士が支える職場、自立へ一歩

今回、中国帰国者二世齊藤貴生さんが経営する齊藤産業（鉄工業）から求人情報がありました。同社では、2年前に樺太帰国者二世Sさんを職場体験実習を通して採用、今では工場内のすべての業務ができる、なくてはならない人材になっています。齊藤社長から求人情報があり、Sさんのような人がいれば採用したいと言います。言葉の問題も、齊藤社長自身が日本語ができるようになったのは帰国後5年だった、と語るように「やる気さえあれば大丈夫」とのこと。

今回は樺太帰国者二世KさんとTさんが、できるかどうか試してみたいと3月に職場体験実習を行いました。工場で指導にあたるのはSさん。Sさんは2年間で日本語もできるようになり、通訳もします。実習の結果、KさんもTさんも仕事に対する理解と、「できる」という自信をつけて採用になりました。帰国者事情を身を持って知る齊藤社長の深い理解のおかげです。がんばれば生活も充実すると激励します。二人とも自立へ向けて力強く歩み出しました。自立研修事業の最後に大きな成果がありました。



もみじ台介護サロン

細やかな気配りやさしい雰囲気いっぱい

地域で帰国者のみなさんの安心を支えようと、NPOシーズネットによる「もみじ台介護予防サロン&ティサロン」は、昨年7月から1ヶ月に1回、続いてきました。竹田憲司先生（北海学園大名誉教授）によるラダーウォーキングは大好評。毎回、1時間楽しみながら運動します。参加者も増えていきます。

介護サロンには帰国者だけではなく、団地の住民の皆さん、民生委員、介護の専門家も参加して、理解や支援、交流の輪が広がります。

運動が終わった後のティーサロンも、毎回シーズンネットスタッフのみなさんの細やかな心配りがあります。1月は中国映画の会、2月はひな祭りを前にテーブルには桃の花が飾られ、桜餅やウグイスもち。ひな祭りの歌が紹介されると、帰国者が二胡を演奏し、温かな雰囲気になった交流会になりました。帰国者のみなさんも「みなさんやさしい」「雰囲気が良い」とすっかり打ち解けています。

参加した住民の皆さんも、回を重ねて「顔と名前がわかるようになってきました」と、安心につながる交流がどんどん進んでいます。

カレンダー市で大活躍！

年の初めに開かれるカレンダーリサイクル市に帰国者8名が、ボランティアとして協力しました。カレンダーの仕分け作業を、3日間それぞれ都合のいい時間帯で手伝いました。他のボランティアさんとのコミュニケーションもばっちり、本当に助かった」と感謝の言葉がありました。

5月・6月・7月の行事

5月18日	出前教室（手稲区）
5月29日	DVD上映会
5月下旬	旭川・おしゃべり交流会
6月13日	日帰り研修旅行
6月15日	出前教室（手稲区）
7月13日	出前教室（手稲区）
7月	DVD上映会